

朝日選書
113



永積安明

軍記物語の世界

永積安明著

軍記物語の世界

朝日選書 113

永積安明 <ながずみ・やすあき>

1908年（明41）山口県生まれ

東京大学文学部国文学科卒

神戸大学名誉教授

〔著書〕

『中世文学の成立』

『中世文学の可能性』

『日本文学の古典』（共著）ほか

軍記物語の世界

朝日選書 113

1978年7月20日 1刷発行

定価800円

著 者 永 積 安 明

発 行 者 角 田 秀 雄

発 行 所 東京・名古屋 朝日新聞社

大阪・北九州

〒100 東京都千代田区有楽町 2-6-1
03(212)0131(代) 振替東京 0-1730

印 刷 所 共 同 印 刷 株 式 会 社



© Y. Nagazumi 1978/装幀・多田 進

0395-259213-0042

目次

序章 『保元物語』から『平家物語』へ……………	3
I 『平家物語』の構想……………	21
II 『太平記』の展開……………	95
III 『将門記』の成立……………	161
結章 軍記物語の世界……………	227
あとがき……………	255

軍記物語の世界

序章 『保元物語』から『平家物語』へ



「平治物語絵詞」三条殿夜討巻より(ボストン美術館蔵)

鎮西八郎為朝

軍記物語といえ、誰でもまず『平家物語』を思いうかべるであろう。しかし『平家物語』の成立する前には、これに先駆けして『保元物語』『平治物語』が生まれている。しかも『平家物語』の古称が『治承物語』でもあったのだから、これらの作品はいずれも、「保元」「平治」「治承」時代の物語であつたことがわかる。つまり保元の乱、平治の乱そして治承の内乱が、この三つの作品の直接の対象であり、こうした一連の内乱の衝撃によって、日本の歴史が貴族社会から武家社会へと飛躍的に変貌した時代、また、その画期を創り出した人間の劇的な行動にそれぞれ主題を求めて、これらの作品は成立しているのである。ところで、『保元』『平治』『平家』物語の対象となつた三つの内乱は、歴史的な事件として時間的に連続しているだけでなく、本質的には同じ事件の中での、いわば段階であり画期であつたのだから、これを対象とした三つの作品には、それぞれ固有の構想が展開されながらも、また同時に共通の表現意識が生まれざるをえなかった。だから、これらの作品には、それ以前の古代貴族社会が創出した物語文学、『竹取物語』『伊勢物語』にはじまり『源氏物語』によって代表される古代末期物語文学の主人公、たとえば在原業平や光源氏などといった優雅な貴族的人物と違つ

て、あらあらしい合戦生活に明け暮れた鎮西八郎為朝・悪源太義平、あるいは朝日の將軍木曾義仲・源九郎判官義経たちが、その主人公の座を占めているのである。

男女間の情愛をめぐる個人の内面世界を克明にたどり、心情のドラマを繊細に描きつくした古代物語文学が、『源氏物語』をはじめとして、およそ女性を対象とした、いわゆる女の文学であったとすれば、劇的な事件の展開、とりわけ合戦という闘争の世界を中心に据えて構想された軍記物語は、まさに男の文学であった。たとえば『平家物語』に先駆けて、中世軍記物語の最初の作品を成立させた『保元物語』に登場し、物語の主題としての保元の合戦を先導した鎮西八郎為朝の像を、ここにかいまみてみよう。

為朝が登場する保元の乱（一一五六年）は、もともと皇位継承をめぐる鳥羽院と崇徳院との対立に出發、やがて崇徳院とその弟、後白河天皇との武力闘争にまで激化した事件であるが、その間、藤原氏の中樞にいた関白忠通・左大臣頼長兄弟の対立を巻き込み、さらに源氏の義朝と平家の清盛という源平嫡々の対決に点火しただけでなく、源氏の内部にも父為義と子の義朝、平家の同族間にも叔父忠正と甥清盛の敵対という骨肉間の死闘をさえ生み出した事件である。『保元物語』も、この事実を、

内裏・仙洞に候ずる源平両家の兵ども、或は親父の命をそむき、或は兄弟の好みを忘れ、思ひ思ひ心々に引きわかれ、父子・伯父甥・親類・郎従にいたるまで、みなもつて各別す。日本国、大略二つにわかれて、洛中の貴賤上下申しあひけるは、「世、今はかうにこそあれ。ただ今うせはてなんずるにこそ。新院（崇徳上皇）と申すは御兄、内裏（後白河天皇）と申すは御弟なり。関白殿（藤原忠通）

と申すは御兄、左大臣殿（藤原頼長）は御弟なり。内裏（後白河天皇方）の大將軍には下野守（源）義朝・安芸守（平）清盛。院（崇徳上皇方）の大將軍には義朝が父六条判官（源）為義、清盛が叔父平右馬助忠正。上といひ下といひ、いづれ勝劣あるべしともおぼえず。但し合戦のならひ、かならず一方は勝ち、一方は負くるならひなれば、かねて勝負しりがたし。是は只、果報の浅深（せんじん）により運命の厚薄（かうはく）にこたふべし」とぞ申しあへる。

と記しているとおりである。

平穩な常時には想像もできなかった、このような事態が、保元の乱にはつぎつぎとおこっているのだが、この、かつてない乱脈な対立をつくり出した崇徳上皇の軍が、いよいよ天皇方に攻め寄せようとする直前、上皇に求められて合戦計画を建議した為朝の風貌について、『保元物語』は、

為朝、幼少より鎮西（ちんせい）に居住つかまつりて、合戦にあふこと既に二十度にあまり卅度に及べり。或は敵を落し、或は敵におとされ、しかる間、毎度勝つにのる先蹤（せんじゆう）をかんがふるに、夜うちにしかず。天の明けざらんさきに、内裏高松殿に押し寄せて三方より火をかけ、一方より攻めんずるに、火ののがるものは矢をのがるべからず。矢をのがるものは火をのがるべからず。舍兄（しゃきやう）にて候ふ義朝ばかりこそ手痛く防ぎ候はむずれ。それをば為朝まんなか仕つて射通しなん。其の外の奴原（やつはら）をば、太刀引き抜きてまんなかに駆け入り、遠からんものをば、さし及びて手打ちに斬つては落し、薙（た）ぎ落し払ひ落し、近きものをば、かいつかんでひつさげて、さげ斬りに斬つて落とし、斬つては捨て、或は頸（くび）ねぢきり、腕（かひな）を引きぬき引きさきなどして馳（め）せ廻（めぐ）らば、行疫神（ぎやうえきじん）はいさ知らず、誰かは面（おもて）を向

くべき。まして又清盛などがへろへろ矢は、もののかずにてや候ふべき。その時定めて行幸他所へなり候はんずらん。御輿に矢を参らすべし。是、為朝が放つ矢にて候ふまじ。天照太神・正八幡宮の放たせ給ふ御矢也。駕輿丁矢におそれて、御輿をうち捨て奉り逃げ散りなむ。その時、行幸をこの御所へなし奉らん事、時刻をめぐらすべからず。

と、言い放つたと述べている。

合戦のはじまる前から、為朝はすでに敵を呑んでおり、勝利を確信している。為朝による速戦速決の計略は、敵の意表をつく夜討であり、まず敵の大將軍たる兄義朝を一矢で射落し、敵陣の真中に駆け入って撫で斬りした上で、天皇を御輿もろとも奪取する。天皇の軍であろうと肉親であろうと、抵抗するものはすべて実力行動によって一挙にこれを撃滅してしまふ、という意欲にみちあふれる人物が、ここには造型されているのであつて、崇徳上皇方の先頭に立つて、天皇方との合戦を領導していった為朝の雄勁な行動は、すでに戦いの始まる前から、ここに予告されているといつてよい。

この為朝が、崇徳上皇の前にはじめて姿を現わした時も、『保元物語』は、

そのたけ七尺にあまりたれば、普通の者には二三尺ばかりさしあらはれたり。生れつきたる弓取りにて、弓手の腕右手より四寸長かりければ、矢束を引くこと十五束、弓は八尺五寸、長持の杓にもすぐれたり。矢は三年竹のきはめて節近きに金色なるを、洗ひ磨かば性や弱かりなるとて、節ばかりかいこそげて、木賊をもつてをし磨き、なほも軽くて折れもやせんとて、鉄をのべて篋中のすぎまで節をとほして入れたりけり。(中略)練鐔の黒漆の太刀三尺八寸ありけるに、熊の皮の尻鞆入れ

てぞはきたりける。鎧よろい輕かろげに着なし、小具足こぐそくつまやかにして、弓脇ゆきにはさみ、烏帽子えぼしひき立てゆるぎいでたる形勢ぎょうせいは、かの刀八たうはち毘沙門びしゃもんの惡魔降伏あくまかうふくのために、忿怒かんだのかたちをあらはし給ふも、かくやとおぼえてをびたたし。いかなる惡鬼あくおに・行厄ぎやく神じんも、面おもてを向くべきやうはなし。かやうに事がらいかめしきのみにあらず。馬の上うまのうへ・徒立ちだち、惣おじて天あめを翔かける翼よく、地を走るけだものの、目をかけつる物を射とどめずといふことなし。将門しょうもん・純友じゆんゆうにもこえ、貞任さだたう・宗任むねたうにもすぐれたり。上代かみよためしなく、末代すえにもありがたかるべき兵つはものなり。

と描き出しているのであつて、七尺をこえる巨漢、左手の腕が右腕より四寸も長い、生まれつきの弓取り、誰も引けない八尺五寸の大弓を引く強力な射手として、為朝は紹介されている。外敵撃退に神通力を發揮するという兜跋毘沙門天とばうびしゃもんてんが、忿怒の形相もすさまじく、矛こを持つて惡魔退治に出陣する姿にたとえられる、怖るべき巨人像こそが為朝の姿であつた。

この為朝の献策も、左大臣頼長に拒否されてしまい、上皇方は逆に天皇方の夜襲を受ける。こうして、上皇の軍は為朝の超人的な応戦にもかかわらず敗走し、大將軍源為義は斬首され、為朝の兄弟たちも、つぎつぎと処刑され、為朝もついに捕えられる。しかし、その怖るべき腕の筋を引き抜かれて伊豆国へ遠流された為朝は、少しもひるまず、たちまち伊豆七島を征服したうえ、南方の鬼が島まで占拠して抵抗を続け、最後まで挫折することを知らない。

為朝の死後も、人びとの想像力は、『保元物語』からさらに飛翔して、為朝を南島琉球に上陸せしめており、琉球王朝の始祖、舜天しゆんてんこそ源為朝の胤であるという伝説が沖縄島に語られるようになる。

一六〇五年（慶長十年）の自序のある袋中上人の『琉球神道記』には、為朝が琉球に渡って、沖縄島北

部地域の今帰仁（国頭郡）に上陸し、巨大な飛礫を打ったと記しており、沖縄の古典『おもろさうし』

にも、大和の軍が今帰仁の運天港に上陸したことを歌った一節が伝えられていて、これらも為朝上

陸伝説に一役を買っているが、いずれにしるこの伝承は、後に曲亭馬琴が脚色した読本『鎮西八郎椿説

弓張月』のような、大がかりの近世小説までを生み出している。

為朝外伝椿説

こうして、権力者をものとしなかった為朝に対する、いわば民族的な憧憬と共感とは、年とともに増幅され、いよいよ仰ぎ見るような巨大な英雄像を創りあげたのであるが、そこには、新しい時代をきりひらいた武士・領主階級の先導者たちの、まだ挫折を知らない、ういういしい精神の軌跡が、鮮明に表現されているのである。

保元の乱が中世を初発する事件であったことは、同時代の大貴族であり、天台宗の総本山としての比叡山延暦寺を統括した慈円の史論書『愚管抄』が、つぶさに記しているところでもあるが、それは、この書に、

保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本国ノ乱逆ト云フコトハオコリテ後、武者ノ世ニナリニケルナリ（巻第四）。

と明記し、保元の乱こそは王朝貴族の時代から封建武士の世紀に、「日本国」を飛躍せしめた画期的事件であることを、いみじくも指摘しているとおりであった。

この武士階級による政権奪取の突破口となった保元の乱を、その全体像としてとらえた文学的表現

こそ『保元物語』であつたのだから、物語の主役としての為朝の姿が、いま見てきたように生氣潑刺とした新時代の強力な推進者として造型され、また中世初頭の叙事詩的作品つまり中世軍記物語の、いわば先導者としての『保元物語』が、この為朝の躍動的な像によって代表されたのも当然であつた。

しかし、この清朗で、ひとかけらの翳りさえない為朝の造型は、全く爽快そのものであるのだが、それは、あたかも上昇期にさしかかった領主階級の、期待と夢を託したかのような行動表現であつて、現実はもっと屈折した状況としてあり、領主階級の歩みも、もっとジグザグに進められていたに相違ない。

為朝の像に託された浪漫的な理想も、引き続き保元の乱・平治の乱をとおして、現実にはくずおれ去つてゆくのであり、現に『保元物語』においても、為朝の陣営つまり父為義の率いた源氏の主力は、たちまち敗北し、為義は首を討たれ為朝自身も捕えられてしまう。超人的な為朝の力量をもつてしても、とうてい動かすことのできない歴史の齒車、もっと複雑で多面的な中世的世界のプロセスは、すでに見えていたのである。

朝日の將軍、源義仲

たとえば保元・平治の乱に続く治承・寿永の内乱は、その規模においても比較にならぬ拡がりを示しただけ、人びとに与えた衝撃も圧倒的に巨大であり、もはや為朝の像に示されたような明快な、し

かし単純な行動によつては、とうてい対処できない混沌とした世界が対象となっている。ここで『保元物語』『平治物語』に続いて、こうした状況に対応する叙事詩的作品としての『平家物語』から、『保元物語』の為朝に対比できる、最も果敢で野性的な英雄像を求めるとすれば、その随一として木曾義仲をあげることができよう。

『平家物語』における木曾義仲は、あの富士川の合戦で平家の軍が総崩れし、やがて入道清盛が熱病によつて悶死するという、危機的状況の中で登場（巻六「廻文」）せしめられているが、実質的な木曾の行動は巻七から開始されている。しかし巻七冒頭の「清水冠者」の段で、木曾は、頼朝によつて最初からその行動を掣肘される。つまり義仲は頼朝と呼応して平家を撃つべく、まず北方から平家勢を排除しつつ都へ攻め上ろうとするが、その時、彼は頼朝の疑いを受けて、背後から早くも頼朝の大軍に追撃され、辛うじて十一歳の嫡男義重を人質に出して、頼朝の心を解かねばならなかった。木曾義仲の行動は、そもその出発から、このような屈折を見せているのであって、為朝のように何のためらいもなく、ただ、まっしぐらに敵に体当たりするような爽快な行動は、もはや、ありえなかったのである。

もちろん頼朝と和睦して後、北国の、たとえば倶利伽羅の、あるいは篠原の合戦で、平家に殲滅的な打撃を与え、一挙に都を占拠するにいたるまでの義仲には、さすがに巨大な源氏武士団の領導者にふさわしい、壮烈・果敢な常勝將軍の像が与えられているが、彼の全人間的な姿が最も鮮明に表現されるのは、巻九の「木曾最期」の一段においてであり、この段において彼はまた、為朝の段階では見

られなかった形の英雄像として表現されている。そこで以下、この「木曾最期」における義仲像をかいまみることにしたい。

平家を都から追い落とした義仲は、占領軍の総帥として都を占拠するが、この野人を統率者とする占領軍は、やがて狼藉のかぎりをつくし、たとえば法皇の御所法住寺殿を攻めて焼き払い、クーデターを敢行して貴族四十九人の官職を停止し、藤原関白松殿の姫を奪い取って押し駕に居坐るなど、強引な独裁者ぶりを発揮して、たちまち都びとの怨嗟の的となる。政治的な危機を察知した頼朝は、義経を派遣して、ついに義仲を討討する。こうして、都から見離された義仲が、孤立して義経の軍と対決し、たちまち壊滅してしまったことは知られているとおりである。この義仲最後の進撃には、もはや為朝の抵抗に見られた、清朗で楽天的な行動の展開など見るべくもない。

この時、義仲の味方は散り散りに落ちて行き、最後まで彼に従う者は六騎にすぎなかった。しかし、いよいよ最後を自覚した義仲は、再び壮烈・果敢な武将としての、本来の姿に立ち帰る。ようやく掻き集めた敗軍の兵三百余騎の先頭に立って、目前に迫る千余騎の敵に突入する木曾義仲の姿を、『平家物語』は、

木曾左馬頭、其の日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾をどしの鍔着て、鍬形打つたる甲の緒しめ、いか物づくりの大太刀はき、石打の矢の、其の日のいくさに射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、重簾の弓持つて、聞ゆる木曾の鬼葦毛といふ馬の、きはめて太う逞しいに、黄覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鎧ふんばり立ち上り、大音声をあげて名のりけるは、「昔は聞きけんものを、